

カール・カウツキーと「歴史なき民」の問題  
——チェコ問題を中心に——

勝 又 章 夫

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第8号 抜刷  
2023年（令和5年）3月20日

# カール・カウツキーと「歴史なき民」の問題

——チェコ問題を中心に——

勝 又 章 夫

## Karl Kautsky and the Theory of Non-historical Nations in the Case of the Czech Question

KATSUMATA, Akio

### Abstract

It is well known that Karl Marx and Friedrich Engels did not support the nationalist movement of the small nations such as the Czechs and the Southern Slavs during the Revolution of 1848. If their negative attitude toward the national liberation movement of the so-called non-historical nations stemmed from the philosophical foundation of Marxism, Karl Kautsky, one of their successors and the most influential theoretician of the next generation of the Marxists, must have taken over this attitude from his masters. Actually, he failed to criticise theoretically the notorious theory of non-historical nations and he reproduced it in his essay of 1887. He could not propose Marxist politics to solve the nationality conflicts in the Habsburg Monarchy and could only borrow the national autonomy from František Palacký, the Czech nationalist leader in the revolution of 1848. Nevertheless, during the World War I, he vindicated the right of self-determination of nations against the imperialism, which included partly a criticism at the theory of non-historical nations.

*Keywords:* Karl Kautsky, non-historical nations, nationality question, Czech question, Habsburg monarchy

### 目 次

- I. はじめに
- II. 1848年革命以後のチェコの状況
- III. カウツキーとチェコ問題

IV. クーノウ＝カウツキー論争

V. 終わりに

## I. はじめに

1848年革命期のチェコ人の運動に対するマルクスとエンゲルスの態度はよく知られている。6月12日にプラハ蜂起が勃発すると、フランクフルトとウィーンでは、蜂起はチェコ人とドイツ人の民族闘争と報じられ、反チェコのな雰囲気包まれたのに対して、マルクスとエンゲルスの『新ライン新聞』はプラハ蜂起をヴィンディシグレーツの軍に対するプラハ市民の革命的闘争と評価し、<sup>1)</sup>『新ライン新聞』はボヘミアではチェコ人に味方してきたと主張した。<sup>2)</sup>しかし帝国議会のチェコ人議員がウィーン革命に背を向けると、「チェコ人の民族的ファナティズムはウィーン奸臣のとてつもない武器だ」<sup>3)</sup>とマルクスは書き、彼らからチェコ人に対する好意的な言葉は消える。チェコ人に対する批判はエンゲルスの「歴史なき民」の理論において頂点に達する。

エンゲルスによれば、チェコ人は「一度も歴史というものを持ったことがない」のであって、「何らかの自立へと到達することができるようには決してならない」<sup>4)</sup>というのである。このエンゲルスの奇妙な発言は、コワコフスキが述べているように、単に「ヘーゲル歴史哲学の残滓」<sup>5)</sup>であるだけではない。本稿の筆者が別稿において指摘したように、民族的解放に対する消極的な態度は、労働者の解放には「普遍的に人間的な解放が含まれている」<sup>6)</sup>とする一方で、「あらゆる隷属関係は」労働者の隷属の「変形と帰結」に他ならないというマルクスの革命論に由来すると思われる。民族的解放に対する消極的な態度がマルクス主義の思想的根底に由来するなら、マルクス以後のマルクス主義者においても「民族的解放という要求と労働者の解放というマルクス主義の要求が理論的、実践的な矛盾として現れ、」彼らが、民族問題の解決のためにどれほど尽力したとしても、彼らがマルクス主義者である限り、民族問題において挫折し、「歴史なき民」の理論を再生産すると推定されよう。<sup>7)</sup>このような仮説に従い、本稿では、チェコ問題、すなわちチェコ民族は存続しうるのかどうか、チェコ民族は独立国家を建設すべきなのか、それとも民族自治で満足すべきなのかという問題を中心に「歴史なき民」の問題に対するカウツキーの態度を検討する。

## II. 1848年革命以後のチェコの状況

エンゲルスによって「歴史なき民」、それどころか「反革命的民族」と呼ばれたチェコ人は、カレル・コシークが述べているように、決して初めから「反革命的民族」として1848年革命を迎えたわけではない。チェコ人はむしろ、ガリアの雄鶏の鳴啼に革命的行為によって応えた中央ヨーロッパ最初の民族の一つであった。<sup>8)</sup>学生と労働者の組織「リピール」はウィーン革命に先立つ3月11日に「学校と裁判においてドイツ語と並んでチェコ語を導入する」<sup>9)</sup>という要求を含む皇帝への請願を作成するために、聖ヴァーツラフ浴場に集会を招集した。ドイツ語とチェコ語の平等という要求は48年革命期にはドイツ人との民族的対立を引き起こし、この要求の実現は、「国家のすべての諸種族は同権であり、どの種族もその民族性と言語を維持し、育成する不可侵の権利を有する」<sup>10)</sup>と定めた1867年の国家基本法19条を待たなくてはならなかった。

1867年12月に公布された国家基本法第19条はその第一項と第二項において諸民族と諸言語の平等を承認し、第三項において第二言語の強制を禁止した。<sup>11)</sup>この第19条はドイツ人とチェコ人の妥協の産物であった。民族と言語の同権を承認した第一項と第二項はチェコ人の要求を受け入れ

たものであり、これに対して、第二言語の強制を禁止した第三項は本来ボヘミアに住むドイツ人がチェコ語を学ばなくてもすむために制定された条項であった。<sup>12)</sup> しかし、この条項は小学校をめぐる闘争においてチェコ人に有利に働くようになる。

この背景にあったのはボヘミアにおける急速な工業的發展である。もともとボヘミアは繊維工業などの軽工業を發達させた地域だったが、1848年革命以降、73年の經濟危機に至るまで食料品製造業、陶器、ガラス工業に加え、炭鋳業、機械工業などの重工業も革命的な發展を遂げていた。工業的發展に伴って農村から労働者が都市へと流入するということは一般的に見られる現象だが、この一般的な現象がボヘミアでは民族問題を引き起こしたのである。<sup>13)</sup> なぜなら、60年代以降、工業の中心地をなしていた北ボヘミアのドイツ人地域にチェコ人労働者が急速に流入したからである。人口の80%がドイツ語を話すドイツ人地域に流入したチェコ人は1880年から1900年の20年間で50万人にのぼり、このようなチェコ人労働者の移動は、とりわけボヘミア北部の炭鋳地域における民族間の力関係を劇的に変化させた。もちろんチェコ人の人口が一方向的に増えたのではなく、ドイツ人も人口を増やしている。しかし1880年から1900年にかけてボヘミア北部の炭鋳地域におけるドイツ人の人口が60%増加したのに対して、チェコ人の人口増加率は300%を超えたのである。<sup>14)</sup>

こうしてドイツ人都市の周辺に主としてチェコ人労働者からなる居住地域が成立すると、そこにチェコ人の職人や商人も移り住み、チェコの民族文化、言語を維持する環境が整った。このような地域で生まれ育った児童はチェコ語しか理解しなかったため、ここで国家基本法19条の第三項がチェコ人に有利に働くことになった。なぜなら第三項は、「第二の州言語」すなわちドイツ語を強制することなく「公的教育制度は整備されなくてはならない」と定めていたからである。

チェコ人労働者のドイツ人都市への流入とチェコ人学校の建設はドイツ人の目から見ると、オーストリアのスラヴ化と映ったが、1879年に發足したターフェ内閣はそれを政治において体現しているように見えただろう。ターフェ内閣は、1880年4月、ボヘミアの「行政、裁判、檢察の諸官庁は、口頭の申し立て、ないし文書による陳情に関して、その当事者に与えられる処理を、二つの州言語[ドイツ語とチェコ語]のうち、この口頭の申し立てが述べられ、文書による陳情が執筆された言語によって、作成する義務を負う」<sup>15)</sup> というターフェ言語令によってチェコ語を全ボヘミアにおける官吏の外務言語として承認したのである。

この言語令はドイツ人には不利であった。なぜなら、教養あるチェコ人は二つの言語を話せたが、ドイツ人は国家基本法第三項の第二言語強制の禁止によって十分なチェコ語の知識を持つ者は稀だったからである。<sup>16)</sup>

このような状況は急進的なドイツ・ナショナリズムを刺激した。ゲオルク・シェーネラーは1882年、当時オーストリア各地で個別的に活動していたドイツ民族派を結集するために、「リンツ綱領」を起草し、「王国のうち、かつてドイツ同盟に加盟していた諸州」、すなわちボヘミア、モラヴィアをも含めた諸州において、「ドイツ的性格が保持」され、「法によってドイツ語が国家語と宣言される」ことを要求した。<sup>17)</sup>

このような急進的なドイツ・ナショナリズムに支えられ、1880年にドイツ学校協会 Deutscher Schulverein が設立された。これに対抗するようにチェコ人側も1880年に中央学校協会 (ústřední matice školská) を設立し、チェコ人児童のためにチェコ人学校を建設し始めた。こうしてドイツ人とチェコ人は児童の教育言語をめぐる激しい闘争を繰り広げるようになった。

ここで注目すべきことは、ボヘミアにおいては民族対立がたいてい階級対立と重なり合っていたということである。その結果、チェコ語を教育言語とする学校に子供を通わせていたチェコ人

労働者はドイツ人経営者、家主による厳しい圧力に曝された。その際にしばしば用いられた手段は住居の解約、職場の解雇を迫るというものであった。<sup>18)</sup> オーストリアの社会民主主義者オットー・バウアーは後に「民族的憎悪は変形された階級的憎悪である」と主張することになるが、<sup>19)</sup> このテーゼはこのような歴史的背景のもとで生まれたのである。

ドイツ人による抑圧にもかかわらず、チェコ人の国民形成は19世紀末にはほとんど完成していた。ボヘミア北部のドイツ人地域ではドイツ人とチェコ人が激しい闘争を繰り広げていたが、ボヘミアの州都プラハではチェコ人が勝利を収めていた。1830年代のプラハでは、「上品な服を着た人々が路上でチェコ語を話すのを耳にすることは極めて稀であった」と言われていたが、1880年にはプラハの人口の14%を占める42,000人がドイツ語を日常言語としていたにすぎず、その数は1910年には37,000人、人口の6%にまで減少してしまう。<sup>20)</sup> チェコ人地域ではチェコ人のドイツ人への同化は停止し、逆にドイツ人がチェコ人に同化されるようになった。

チェコ人の国民形成にとって象徴的だったのはプラハをチェコ人の都市にしたことだけではない。1881年、プラハ大学はドイツ人とチェコ人の間で分割され、同年にオープンした国民劇場は、二ヶ月後焼失したが、わずか二年後には再建され、このようにしてチェコ人は自らの学問と芸術の中心地を獲得し、文明的な民族が持つ文化施設をすべて備え、文化的に成熟した民族という外観を備えるに至った。<sup>21)</sup>

### III. カウツキーとチェコ問題

カール・カウツキーは1854年10月16日プラハに生まれた。父はチェコ人の画家ヤン・ヴァーツラフ・カウツキー、母はドイツ人の女優ヴィルヘルミーナ・エレオノーラ・アナであったから、カウツキーはドイツ人とチェコ人両方の血を引いていた。少年時代のカウツキーはどのような民族的アイデンティティを持っていたのだろうか。晩年のカウツキーは少年時代を振り返り、若き日の民族的アイデンティティを説明している。カウツキー自身の回想によると、彼の「最初の政治思想は民族理念」であり、それは「フス派的な極めて急進的なチェコ・ナショナリズムだった」という。もっとも彼の母の家庭はドイツ人であり、カウツキーの母語はドイツ語だったので、「一面的にチェコ民族派だったわけではない。」<sup>22)</sup> それでも「十七歳になるまで熱狂的なチェコ・ナショナリスト」であり、「あらゆるドイツ人を宿敵と看做し、ドイツ人であることほど罪深いことはないと思っていた」<sup>23)</sup> という。カウツキーにナショナリズムを克服させたのはパリ・コミューンであった。パリ・コミューンを通じてカウツキーは社会主義のインターナショナリズム、「民族に関心も理解も持たない思想ではなく、どの民族にも同じ関心と理解を持って接しようとする思想」<sup>24)</sup> に到達したのだという。

このような晩年の発言から、若きカウツキーの民族的アイデンティティがどのようなものであったのかが分かる。彼が十代の時に熱中した急進的チェコ・ナショナリズムは「オーストリアの破壊」<sup>25)</sup> を求めるものであり、帝国の維持を求めるパラツキーのオーストロ・スラヴ主義とは正反対の性格のものであった。<sup>26)</sup> 後にカウツキーはチェコ人のナショナリズムを厳しく批判することになるが、それは、決してヴィクトル・アードラーやオットー・バウアーのように、ドイツ・ナショナリズムに由来するものではないと言えるだろう。<sup>27)</sup>

カウツキーはウィーン大学の学生になると、学生時代から社会主義運動に参加するようになった。この時期においてすでにカウツキーは民族問題に関心を寄せており、1875年、ドイツの社会民主党の機関紙『フォルクスシュタート』紙に「民族問題」という論文を発表し、ナショナリズ

ムはもう時代遅れであると主張した。労働運動だけでなく、工業の代表者であれ、宗教、学問の代表者であれ、すべては国際的になっており、民族にこだわるのは保守的な俗物だけである、というのである。<sup>28)</sup>

民族問題に対するこのような態度は、初期の労働運動にしばしば見られる態度であり、オートー・パウアーはそれを「素朴なコスモポリタニズム」と呼んでいるが、それは、この当時の労働運動において一定のリアリティを持っていた。この当時の労働運動において中心的な役割を果たしていたのは工場労働者ではなく、まだ職人であり、諸国を遍歴して技を磨く職人にとってナショナリズムはブルジョアの偏見に見えたのである。<sup>29)</sup>

自伝によると、カウツキーは1880年にマルクス主義者になる。カウツキーは当時ロンドンに滞在していたマルクスとエンゲルスと連絡をとり、エンゲルスと頻繁に文通を交わすようになる。カウツキーは様々な問題に関してエンゲルスの助言を求めているが、エンゲルスの書簡の中に東ヨーロッパのスラヴ系諸民族の解放運動に対して社会主義者がどのような態度を取るべきかを説明した書簡がある。その1882年の書簡においてもエンゲルスは、48年革命期に展開した「歴史なき民」の理論を繰り返している。

80年代のエンゲルスの見解は以下の三点に要約されよう。彼がこれらの少数民族の独立に反対したのは、第一に、これらのスラヴ系少数民族がロシア・ツァーリズムの道具として機能しており、第二に、これらの諸民族には独立のための客観的基礎が欠けていると考えたからである。<sup>30)</sup> 第三に、これらの諸民族もプロレタリアートが勝利するまでその解放を待たなくてはならない、とエンゲルスはベルンシュタイン宛の書簡において主張した。<sup>31)</sup>

エンゲルスの助言を得てカウツキーは1887年、論文「近代民族」を発表する。1881年においてなおカウツキーは同時代のチェコの民族闘争を千年前に始まったゲルマン人とスラヴ人の闘争の継続と看做していたことを想起すれば、<sup>32)</sup> 1887年の論文は、現代チェコの歴史家ズデニェク・ショレが述べているように、民族問題とその歴史的起源を分析するマルクス主義の能力を示していたが、<sup>33)</sup> 同時代のチェコ民族の現状を捉え損ねていたと思われる。カウツキーによれば、「チェコ民族の維持はほとんど考えられない」というのである。というのも「チェコ民族がどれほど急速に拡大するとしても、彼らにはやはり、今日の生産関係の下で生産の自立性をある程度まで可能とするような規模の経済領域を獲得することに成功しない」からだという。「資本主義はチェコ民族よりも速く発展する」ので、「チェコ民族はその隣人、とりわけドイツ民族にますます依存するようになる」だろう。ドイツへの依存に反対しているのは、「ドイツ語の知識がないことを民族的美德と看做す青年チェコ派であり、彼らは「農民と小ブルジョアの代表」である。資本主義の発展に伴い農民と小ブルジョアは没落するだろうから、「彼らとともに彼らが話す言語も没落する。」それ故、カウツキーによれば、資本主義が発展すればするほど、「ボヘミアにおけるチェコ語の経済的意味は薄くなり、ドイツ語のそれは増大するだろう。ボヘミアにおけるドイツ語の進歩を妨げようとする試みはどれも、結局は、この国の経済発展の妨げとならざるを得ない。チェコ民族の育成は経済的発展の促進をほとんど意味しない」<sup>34)</sup> という。しかし上述したように、80年代にチェコ人は「文化的に成熟した民族という外観を備えて」いたとすれば、カウツキーの主張が的外れだったことは明らかである。カウツキーがこのような結論に陥った原因は二つ考えられる。一つはエンゲルスの影響である。ホレス・デイヴィスが述べているように、オーストリア・ハンガリーのスラヴ人に未来はないというエンゲルスの見解をカウツキーは受け入れており、<sup>35)</sup> ズデニェク・ショレが指摘しているように、「48年革命期のすでに時代遅れとなった見地がチェコ民族の状況に関する理解を妨げていた」<sup>36)</sup> のである。しかしそれはカウツキー自身の民族観、言語観の帰結でも

あったと思われる。カウツキーによれば、14世紀の商業資本主義が民族言語の成立を促し、国際的な交流が増大すると、「世界語」が必要とされるという。カウツキーは言語と民族を資本主義的發展の付随現象と看做していたと言えよう。このような民族観、言語観においては、資本主義的發展に伴って小民族が大民族に吸収されると推定されるだろう。このようなカウツキーの民族観、言語観の根底にはダーウィン主義があったと思われる。後にカウツキーが述べているように、彼の歴史理論は、「歴史的発展に対するダーウィン主義の応用」<sup>37)</sup>にほかならず、ヴァルター・ホルツホイアーが指摘しているように、カウツキーは世界史を「種族、民族、階級のような社会集団の生存競争と理解していたとすれば、「チェコ民族の維持はほとんど考えられない」というカウツキーの主張はエンゲルスの「歴史なき民」という歴史哲学的な概念を単に継承した結果ではなく、民族と言語を資本主義的發展の付随現象と理解すると同時に、歴史にダーウィン主義を応用したことによって、「歴史なき民」の理論を再生産した結果ではないだろうか。そうだとすれば、カウツキーが「歴史なき民」という言葉を使っていないとしても、『「歴史なき民」』という非歴史的理論を拒否したという点で、カウツキーはマルクス、エンゲルスとは異なっていた<sup>38)</sup>というジョン・シュワルツマンテルの理解は不十分であると言えよう。「チェコ民族は維持できない」という主張の理論的背景がなんでもあれ、現実との乖離は明らかであり、理論的修正は不可欠であった。

エンゲルスが1895年に死去すると、その翌年の1896年カウツキーはエンゲルスが48年革命のチェコ人に関して書いたことを訂正する機会を得た。カウツキーは、エンゲルスの著作『ドイツにおける革命と反革命』をドイツ語に翻訳し、それに序文を書くことになったのである。エンゲルスの著作『ドイツにおける革命と反革命』は、1852年、『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』にマルクスの名前で連載されたものである。この本のなかでエンゲルスはチェコ人を死滅しつつある民族と看做し、今後チェコ人はドイツの一部としてしか生き残れないと述べていた。このような「歴史なき民」の理論を批判することがカウツキーの序文のテーマであった。

カウツキーがエンゲルスの『ドイツにおける革命と反革命』のドイツ語版に序文を書いたときに、まず配慮しなくてはならなかったのはチェコ人の社会主義者であった。カウツキーは「オーストリアに関する章は同書のなかでも最良の章の一つ」であるとエンゲルスの著作を高く評価しつつも、チェコ人に関する叙述は「やや失敗」しており、「スラヴの繊細な同志たちを私は序文のなかでなだめてやらなくてはなりません、」と序文執筆の目的を語っている。<sup>39)</sup>

当時オーストリア社会民主党はドイツ人、チェコ人、ポーランド人などの諸民族の社会主義者の連合体だった。社会民主党は党内において諸民族は自治的であるとされていたが、ドイツ人社会主義者のなかにはオーストリア社会民主党はドイツ人の党であるものも少なくなかった。この傾向はとりわけオーストリアのドイツ人社会主義者の指導者ヴィクトル・アードラーの民族問題に対する態度に現れている。アードラーはオーストリアにおける民族問題を過小評価し、「社会民主党の言語はドイツ語である」と主張したのである。<sup>40)</sup>ドイツ人社会主義者のドイツ・ナショナリズムにチェコ人社会主義者が反発したことは想像に難くない。チェコ社会主義者たちは、繰り返し諸民族と諸言語の平等を求めることになる。<sup>41)</sup>

カウツキーはこのような社会民主党の内部に存在した民族対立の存在を重視していた。1880年代にアードラーがオーストリア社会主義に参加し始めたときも、カウツキーは「ドイツ人児童のスロヴェニア化やチェコ化を彼らに加えられた不正と看做している」<sup>42)</sup>というアードラーのドイツ・ナショナリズムを危険視していたし、チェコ人社会主義者の不満も理解していた。カウツキーは「オーストリア社会主義党の第一の課題」という論文において次のように指摘している。オーストリアの社会民主主義者のなかには「スラヴ人を文化水準の低い者としか見ない民族的偏狭さ

が存在しており、これが様々な諸民族の間の兄弟的協力を妨げている。」と。<sup>43)</sup>

カウツキーにはチェコ人を死にかけた民族と看做したエンゲルスの論文を論評抜きで出版することはできなかったのである。カウツキーはエンゲルスの「歴史なき民」の理論の歴史的背景を示し、状況が変わった現在では、この発言は無効であると証明しようとした。ロマン・ロスドルスキーは、エンゲルスの「歴史なき民」の理論に「徹底的な歴史研究」を対置したカウツキーの序文を「独創的な研究者としてのカウツキーの名誉」として高く評価している。<sup>44)</sup>

カウツキーが指摘する「歴史なき民」の理論の第一の歴史的背景はチェコの地理的位置である。カウツキーによれば、48年革命の敗北後、マルクスとエンゲルスは次の経済危機とそれに伴うであろう革命を期待していた。もし革命が成功すれば、チェコ民族の運命はもう決定されたものとして映ったに違いない、とカウツキーはいう。革命の成功によって人の交流が自由になると、暴力的なゲルマン化がまったくなくても、ドイツ文化がもたらす文化の力によって、チェコ人はドイツ人になっただろう、そうエンゲルスは考えたのだとカウツキーは主張する。<sup>45)</sup>

カウツキーが第二の歴史的背景として挙げたのはドイツ人とスラヴ人の人口比率である。エンゲルスが『ドイツにおける革命と反革命』を執筆した1850年代、ボヘミア、モラヴィア、シレジアはまだドイツ連邦に属していた。スロヴェニア人を除くと、スラヴ人が住むオーストリアの他の諸州はドイツ連邦に属していなかったので、300万か400万人のチェコ人がおよそ4,000万人のドイツ人に対峙していたことになる。この人口比率はチェコ人の未来を希望のないものに見せるのに十分であったとカウツキーは言う。<sup>46)</sup>

第三の歴史的背景はチェコ民族の階級構成である。カウツキーによれば、1848年革命において最も民族的な階級はブルジョアジーであった。なぜなら彼らの要求は全民族の要求に最も近く、その利害は民族統一を要求していたからである。しかし、チェコ人はまさにこの階級を欠いており、民族闘争の指導者として一部の小ブルジョアしか持たない民族であった。「その地理的な位置とわずかな人口と並んで、まさにこの階級構成がチェコ民族から存在のための一切の展望を奪ったのである」とカウツキーは主張した。<sup>47)</sup>

エンゲルスの「歴史なき民」の理論を成立させたこれらの論拠は、カウツキーによれば、ことごとく失われた。期待された革命は勃発することなく終わり、チェコ人ないしスラヴ人とドイツ人の人口比率も変化した。1866年にオーストリアがドイツから締め出されると、オーストリアでは1,100万人のスラヴ人と700万人のドイツ人が対峙することになったからである。そしてチェコ人はいまや自らのブルジョアジーを持っている。こうしてエンゲルスの発言は今日では完全に無効となったとカウツキーは主張したのである。

エンゲルスの『ドイツにおける革命と反革命』へのカウツキーの序文は単なるエンゲルス批判以上の意味を持っていた。カウツキーの序文において第一に注目すべき点は、資本主義と国民形成に関するカウツキーのこれまでの考え方を修正したということである。1887年の論文「近代民族」においては、民族と言語は資本主義的發展の付随現象と看做されており、資本主義的發展の前でチェコ人のような小民族が生き残ることはできないとされていた。これに対して、「序文」においては、資本主義的發展が小民族の發展も促すという認識を示している。「経済的、学問的観点からすれば、国民的制約をますます取り払い、小民族に世界語の使用を押し付けている、まさにこの現代的發展が、新しい民族文学を生み出している。」というのも「『知識人』の数的増大ならびに下層階級における教養の増大、交流、政治的関心の増大は、新聞文学と大衆文学に広範な基礎を与えている」からである。その結果「フラマン文学、ノルウェー文学、ならびにチェコ文学が生み出された。」と。<sup>48)</sup>



第二に注目すべき点はオーストロ・マルクス主義の理論的發展に大きな影響を与えたということである。カール・レンナーは「民族問題の領域におけるカウツキーの労作はオットー・バウアーと私によって様々な方向へと補われた」<sup>49)</sup>と述べているが、オーストロ・マルクス主義の民族理論にカウツキーが影響を与えたことは『ドイツにおける革命と反革命』への序文からも読み取れる。バウアーはその主著『民族問題と社会民主主義』においてエンゲルスの「歴史なき民」を批判し、「歴史なき諸民族」という新たな概念を提起した。この「歴史なき諸民族」をバウアーは支配階級しか民族文化の担い手になれない時代に、その支配階級を持たなかった民族と定義することになるが、<sup>50)</sup> カウツキーはブルジョアジーを持たないというチェコ民族の階級構成の特殊性を指摘することによって、オットー・バウアーの民族理論を先取りしている。さらに資本主義の発展が、小民族の発展も促すという認識もバウアーに知られていたであろうから、ロスドルスキーが指摘しているように、「歴史なき民族の覚醒に関するオットー・バウアーの分析もカウツキーの研究を受け継ぎ発展させたものである」と言えよう。<sup>51)</sup>

カウツキーは48年革命期のエンゲルスの「歴史なき民」の理論を否定することによって、オーストリアにおける民族問題の解決策として民族自治を提唱することになる。論文「オーストリアにおける民族闘争と国家権」においてカウツキーは次のように述べている。オーストリアにおいて「中央集権制」はもはや不可能であり、「オーストリアは連邦国家としてしか存続し得ない。」しかし「王国と領邦の連邦制」も中央集権と同様に、生命力を持たない。唯一残された可能性は「諸民族の連邦制、すなわち伝統的な州境の廃止と言語の境界に基づくオーストリアの再編である、」という。<sup>52)</sup>

マルクス主義者のカウツキーがエンゲルスの「歴史なき民」の理論を批判し、エンゲルスが「歴史なき民」と看做したチェコ人によって提唱された民族自治を取り入れたことはまさに歴史の皮肉であると言うべきだろう。もちろんカウツキーは民族自治をパラツキーから継承したとは述べていないが、同時代の人々にとってカウツキーとパラツキーの類似性は一目瞭然であった。カウツキーが民族自治を提案した直後に出版された著書においてマサリクは、カウツキーが「1848年のハヴリーチェクとパラツキーの民族、言語綱領、すなわち民族連邦制に到達した」と指摘している。<sup>53)</sup>

チェコの歴史家オットー・ウルバンが述べているように、オーストロ・スラヴ主義とオーストロ・マルクス主義の接点に関しては、まだ体系的な分析は行われていない。<sup>54)</sup> 日本でもオーストリア社会民主党と民族問題に関する矢田俊隆氏の研究はレンナーとバウアーを中心に論じ、カウツキーには言及していないし、<sup>55)</sup> 丸山敬一氏も同様である。<sup>56)</sup> 1898年から1899年にかけてオーストリアの民族問題を論じたカウツキーの一連の論文を検討した相田愼一氏の研究も、カウツキーの主張がオーストリア社会民主党の「ブリュン民族綱領」と「基本的に一致する」と指摘してはいるもののオーストロ・スラヴ主義との関連は指摘していない。<sup>57)</sup> 相田氏は後にカウツキーと民族問題に関する包括的な研究を発表するが、そこでもパラツキーの民族自治構想をカウツキーが「民主主義的綱領」<sup>58)</sup>と看做していたと指摘するとどまっている。<sup>59)</sup> 日本におけるオーストロ・マルクス主義の研究はバウアーとレンナーに偏り、カウツキーには着目してこなかった上に、オーストロ・スラヴ主義との関連は等閑視されてきたように思われる。オーストロ・スラヴ主義とオーストロ・マルクス主義の接点を明らかにする上で大切なのは、民族自治に関する思想的共通性であろう。

パラツキーとカウツキーの共通点はパラツキーの「フランクフルトへの書簡」に見て取ることができる。第一に民族自治の必要性の根拠に共通点が見られる。周知のように、「フランクフルトへの書簡」の目的はフランクフルト国民議会において成立しつつあった統一ドイツへのチェコ人

の編入を拒否することにあつた。しかしパラツキーが危険視したのはドイツだけではない。パラツキーはスラヴ人、マジヤール人、ドイツ人などの諸民族のうち、「単独で東方の強大な隣人に対して将来にわたり成功裏に抵抗することができるほど強力な民族はない」<sup>60)</sup>というオーストリア諸民族の状況に基づいて、オーストリアにおける民族自治を主張した。山中秀人氏も指摘しているように、パラツキーにとってオーストリアはロシアから諸民族を守り、個性と独自性とを發展させる保障となるべき「盾」であつた。<sup>61)</sup>これと同じ論拠はカウツキーにも見られる。カウツキーによれば、オーストリアを一つに束ねているのは、オーストリアの「国家理念」などではなく、「ドイツ帝国とロシア帝国の鉄の輪である。」様々な諸王国と諸領邦と一緒にいなくてはならないのは、「これらの諸国のどれも単独で存在するには脆弱すぎるからである、」と。<sup>62)</sup>

パラツキーとカウツキーはどちらも、ロシアとドイツという東西の大国の間で小民族が生き残るための手段としてオーストリアにおける民族自治を提案していると言えるだろう。パラツキーに代表されるオーストロ・スラヴ主義は単に民族自治を主張しただけではない。民族自治を実現するためにはオーストリアが維持されることも必要であつた。パラツキーは「もしオーストリアが存在しなかったとすれば、それを可及的速やかに、創り出さなくてはならない」<sup>63)</sup>と述べたが、それと同様に、カウツキーによれば社会民主党はオーストリアの維持を要求しなくてはならないというのである。カウツキーによれば、社会民主党は「最も断固として諸民族の和解という意味において働きかけ、諸民族の間の乖離を橋渡しするのに適したあらゆる措置を支持する。それ故、社会民主党は、望むにせよ望まぬにせよ、意識的にせよ無意識的にせよ、自分の綱領に基づくにせよ、状況の圧力のもとでそうするにせよ、オーストリアでは帝国を繋ぎとめる政策に賛同するのであり、その崩壊を促進するものすべてに対して戦う」<sup>64)</sup>という。大国に対抗するためにオーストリアを維持し、国内では、民族自治を実施するという二点においてカウツキーの民族政策はパラツキーのオーストロ・スラヴ主義と重なり合うと言えよう。

#### IV. クーノウ＝カウツキー論争

カウツキーはエンゲルスの「歴史なき民」の理論がもはや無効であると主張することによって、チェコ人が生命力を持つ民族であることを承認し、オーストリアにおける民族自治というオーストリア社会民主党の民族政策の基礎を築いた。他方でカウツキーはエンゲルスの主張を歴史的に説明することによって、48年革命期の歴史的背景の下で正当化し、エンゲルスを理論的に批判するには至らなかった。<sup>65)</sup>このようなカウツキーの限界が如実に表れたのが、第一次世界大戦期に行われたドイツ社会民主党右派のハインリヒ・クーノウとの論争であつた。

この論争は1915年のクーノウの小冊子『党崩壊』にカウツキーが批判を寄せたことに始まる。この論争におけるクーノウの主要な目的は民族自決権の否定であつた。クーノウによれば、民族自決権なるものはマルクス主義的ではない。なぜなら、クーノウによれば、「勝手にでっち上げられ、仮定された権利命題、道徳命題から単純になんらかの政治闘争の正当性を導き出すのはマルクスの方法と真っ向から対立する」ものであり、マルクス主義者が承認すべきなのは「歴史的に条件づけられ、歴史的発展における事実そのものから生じ、それと一致する権利」だけであるが、民族自決権は歴史的発展と合致しない。歴史的発展は民族的差異化過程ではなく、むしろ「大規模な融合過程、少数民族の大きな民族への継続的な合併」を示しているというのである。<sup>66)</sup>

さらにクーノウはエンゲルスの「歴史なき民」の理論に依拠して、すべての民族に与えられる民族自決権は反動的であると主張する。なぜなら「生命力を持たず、多かれ少なかれ歴史と文化

を欠いた諸民族も、その自立が今後の文化的発展のためにならず、障害として作用せざるを得ない場合でさえ、民族的自立の権利を有するからである。<sup>67)</sup> クーノウは『新ライン新聞』の論文「民主的汎スラヴ主義」と「マジヤール人の闘争」を引き合いに出し、マルクスとエンゲルスが、民族自決権を嘲笑し、それどころか、少数民族の強制的な併合さえ、一定の条件下では認めたと論ずる。<sup>68)</sup> 民族問題の領域におけるマルクス主義の原則的な立場を前提とした場合、このようなクーノウの主張を論駁することは困難である。というのも、研究史においても指摘されてきたように、クーノウは『新ライン新聞』の民族政策を少なくとも「形式的には」正しく理解しており、<sup>69)</sup> 「正統派マルクス主義の見地からすると正しい」からである。<sup>70)</sup> それ故、カウツキーは『ドイツにおける革命と反革命』への序文において「歴史なき民」の理論を歴史的に解明しようと努力はしたものの、理論的な批判を怠っていたために民族問題をめぐるクーノウとの論争において窮地に陥ることになる。

カウツキーもすべての民族に自決権を承認するわけではない。ここでカウツキーは後にレーニンによって継承される論理を展開し、民族自決権に一定の制限を加える。「マルクス主義者にとっては」「権利と道徳の根本命題も」「相対的」であり、このような根本命題の一つが他の根本命題と衝突する場合、「低次のものが高次のものに席を譲らなくてはならない」のであって、「ある民族の自立への闘争が全体の進歩を妨げるとすれば、我々社会民主主義者はその闘争に反対しなくてはならない」という。<sup>71)</sup> ここまではカウツキーのクーノウ批判は説得的である。クーノウが「ドイツ帝国のような文化国家」に民族自決権が承認されないのは奇妙であると述べて、覇権主義を肯定しているのに対して、カウツキーは、「歴史なき民」の問題を「民族解放闘争」と「より高次の文化的利害」<sup>72)</sup> の矛盾に見出したメーリングの問題意識を継承し、覇権主義に対する武器としての民族自決権と、大民族の文化的進歩に対する障害としての少数民族の自立という民族自決権のアンビヴァレンスを考慮し、合理的な解決を探ろうとしているからである。

しかし1849年の『新ライン新聞』の民族政策を「マルクスの誤り」<sup>73)</sup> として片付けたときにカウツキーの理論的脆弱さがむき出しになった。これに対してクーノウは、マルクスとエンゲルスが南スラヴ人の文化能力の評価において誤ったとしても、「そのことによって、歴史的によく基礎づけられた把握は無効にはならない」<sup>74)</sup> と応えた。

カウツキーに残された対抗手段は「歴史なき民」の理論を唯物史観から追放することだけであった。1917年の論文「諸民族の解放」においてカウツキーはエンゲルスの論文が1849年に執筆されたという点に活路を見出そうとする。カウツキーによれば、「史的唯物論とその応用の深化と成熟は1848年革命崩壊後の10年間に著しい進歩を遂げた」のであり、「初期の立場と後期の立場に相違が見られる場合には、我々にとっては前者よりも後者が重きをなすのでなくてはならない」と。<sup>75)</sup> これがクーノウに対する反論にならなかったことは明らかである。『ドイツにおける革命と反革命』『ポーとライン』などの著作は「革命崩壊後の10年間に」発表されたものであり、マルクスとエンゲルスの民族政策は基本的に変化していないからである。クーノウはマルクスとエンゲルスの初期の民族政策と後期のそれとの間に違いがあるというカウツキーの主張を「カウツキーの作り話」として一蹴する。<sup>76)</sup> カウツキーは第一次世界大戦後に自らの思想の集大成として『唯物史観』を発表したが、そこでも同じ主張を繰り返している。「かくしてマルクスとエンゲルスは1848年に、反革命が若干のスラヴ諸民族に見出した助力に憤激し、これらの諸民族をゲール人やブルトン人と同様に、没落に委ねられたものと看做した。これは巨大な誤りであった。我々の師匠たちは、後に再びこのような意味で発言したことはなかった、」と。<sup>77)</sup> しかし、これをロスドルスキーのように単なる歴史の歪曲と捉えるなら、<sup>78)</sup> カウツキーの意図を正当に評価したことにはなるまい。なぜ

なら、クーノウとの論争においてカウツキーは民族自決権を守ろうとしたからである。

民族自決権をめぐる論争においてカウツキーはクーノウを批判しきれなかったが、カウツキーはこの論争を契機として民族問題に取り組み「歴史なき民」の理論の批判を進めている。

第一にカウツキーはエンゲルスの「歴史なき民」の理論を成立させた背景にもう一つ説明を加えている。カウツキーはすでに1896年の『ドイツにおける革命と反革命』への序文において、エンゲルスがチェコ人の没落を不可避と看做した背景として、チェコの地理的位置、ドイツ人とスラヴ人の人口比率、チェコ人の階級構成の特殊性を挙げていた。カウツキーはこれらの説明に、農業地域から工業地域への人口の流入を加える。「あらゆる資本主義国において工業労働者は、自然増によるだけでなく、農業から工業への力強い流入によって、常に増大する。言語混合地域においては、これは農業住民しか持たない民族が、工業地域へと成員を常に譲渡することを意味する。工業地域では別の言語が話され、この言語は流入する者によって習得され受け入れられる。かくして農業にとどまっている民族は多民族国家においては、しだいに吸収され、最終的には消滅する。彼らは救いようもなく没落に委ねられている。これこそが、1849年にマルクスとエンゲルスによって、その『完全な根絶と脱民族化』が不可避とされた『民族の残片』である。例えば、スコットランドのゲール人、フランスのブルトン人、スペインのバスク人、チロルのラディーン人、プロイセンとザクセンのソルブ人ないしヴェンド人がそうである。』<sup>79)</sup> カウツキーによれば、1849年にマルクスとエンゲルスが、オーストリア・スラヴ人に没落を宣告したのは、これらの諸民族がまだ文章語を發展させていなかったからである。しかし、48年革命以来、状況は変化している。スラヴ人は大学を持ち、強力な出版業と豊かな文学を有している。これらの諸民族は工業地域に流入しても、もはや自分たちの民族性を失うことはない。これが今日ボヘミアとモラヴィアの諸都市で進行している事態である。<sup>80)</sup>

第二にカウツキーは「歴史なき民」の理論の批判から「民族自決というインターナショナリズムの立場」の必要性を導き出している。カウツキーによれば、48年革命以後の変化にもかかわらず、マルクスとエンゲルスの「歴史なき民」の理論を「現在の指針」として引き合いに出す者があるとすれば、それは、「状況に関する完全な無知か、このような無知にあつかましく当て込むことにすぎない」という。<sup>81)</sup> それでは、48年革命の経験からいかなる教訓が引き出されるべきなのか、カウツキーによれば、それは、少数民族の自決権を否定することではあり得ない。むしろ48年革命はインターナショナリズムの必要性を示しているのである。カウツキーは次のように述べている。「1848年のオーストリア革命は、スラヴ人の反革命的な態度と同時に、チェコ人とイタリア人を支配するためのドイツ人の闘争、クロアチア人を支配するためのハンガリー人の闘争によっても挫折した。」したがって、「1849年の革命の教訓」は「民族自決というインターナショナリズムの立場を離れることによって、現代の革命運動がどれほど危険にさらされるかということだけである」と。<sup>82)</sup>

カウツキーのインターナショナリズムは、上述したように、民族自決権を全体の利害に従属させたことによって、著しく損なわれていた。しかし「歴史なき民」の理論に対するカウツキーの批判はマルクス主義の原則的な立場への批判も含んでいた。これが、「歴史なき民」の問題に関する論争におけるカウツキーの第三の理論的貢献である。カウツキーが批判の矛先を向けたのは、政治的、経済的集中は近代資本主義の歴史的発展傾向であり、少数民族の自立は時代錯誤である、という認識であった。これは言うまでもなく、1887年の論文「近代民族」においてカウツキー自身が代表した立場である。事実、「およそ16世紀以来、ヨーロッパの歴史的発展に登場した大国民国家の形成は、当時の無数の少数民族の国家的自立ではなく、より大きな国家構築物へのしばし

ば暴力的な結合に存する」<sup>83)</sup> というクーノウの主張は、「資本主義はチェコ民族よりも速く発展する」というかつてのカウツキーの主張を想起させる。しかしカウツキーは資本主義の発展が小民族の発展も促すという認識に達しており、今や帝国主義イデオロギーとして機能するようになった「歴史なき民」の理論に国民国家の擁護を対置する。もちろんカウツキーも、すべての民族が自らの国民国家を建設できると考えていたわけではない。彼はチェコ人が独立国家を建設してもなお、その自立の能力を疑っていた。チェコ国家はその地理上の位置故にドイツに反対する政策をとることはできないのだから、ドイツの従属国になるというのである。<sup>84)</sup>

カウツキーはまず、経済領域の拡大に伴って国家領域も拡大しなくてはならないという「歴史なき民」の理論の前提に批判の矛先を向ける。もちろんカウツキーも国家が経済的条件に依存していることは認める。しかしカウツキーによれば、「国家領域は決して経済領域とは一致しない」という。<sup>85)</sup> ベルギーやスイスのような小国はロシアよりも巨大な工業を発展させているし、これらの小国が大国に参加することもあり得ないとカウツキーは言う。資本家にとっては、彼らが完全に支配する小市場の方が、競争相手によって支配される大市場よりも都合がいいのであるから、「経済的発展がそれら[ヨーロッパの小国]を『超民族国家』への埋没へと追いやることは決してない」<sup>86)</sup> とカウツキーは主張する。

理論的前提に対する批判に続くのは、「歴史なき民」の理論に基づいた帝国主義的併合の正当化に対する批判である。カウツキーは次のように述べている。「一国家において大民族が『民族の屑』を吸収する過程は、大国による小国の吸収と取り違えられてはならない。これらの経験はどちらも、しばしば同一視され、後者も前者と同様に、あらゆる領域において小経営から大経営へと移行する資本主義的生産様式の必然的帰結と看做されている。これは実にマルクス主義的に響き、マルクス主義と称されているが、それはマルクス主義ではない。」<sup>87)</sup> このようにカウツキーが帝国主義に対して小国の自立を擁護することができた背景にあったのは、資本主義の発展が小民族の発展も促すという認識であった。

このようにカウツキーはクーノウとの論争において歴史なき民の理論への批判を継続しつつも、自らの限界も露呈させていたとすれば、クーノウとの論争において歴史なき民の理論が「完膚なきまでに批判されている」という相田慎一氏の主張はカウツキーを過大評価しすぎているように思われる。<sup>88)</sup>

## V. 終わりに

晩年のカウツキーはナチス・ドイツによるチェコスロヴァキア解体直前の1937年、「歴史なき民」の問題に立ち返り、「チェコ人に対する憎しみ」を「ドイツ人の革命的情熱」と呼ぶエンゲルスの態度はマルクス主義思想の土台を犠牲にしていると述べた。<sup>89)</sup> しかし、「歴史なき民」の理論に見られるようなマルクスとエンゲルスの民族的解放に対する消極的な態度は、マルクスの思想の根底にある人間観に由来すると理解すべきであろう。そうだとすれば、マルクス以後のマルクス主義者も、彼らがマルクス主義者である限り、民族問題において挫折すると推定される。チェコ問題と「歴史なき民」の理論に対するカウツキーの態度を検討することによって、カウツキーの挫折を明らかにできたと思われる。カウツキーの挫折は第一に、言語共同体としての民族を資本主義的発展の付随現象として理解することによって、チェコ民族の維持は考えられないと主張し、エンゲルスの「歴史なき民」の理論を再生産したことである。第二に、カウツキーはエンゲルスの『ドイツにおける革命と反革命』のドイツ語版への序文においてエンゲルスの「歴史なき

民」の理論がもはや無効であり、チェコ人が生命力ある民族であることを承認したにもかかわらず、民族問題の解決策としてマルクス主義に固有の政策を提起することができず、オーストロ・スラヴ主義から民族自治という政策を借用したにすぎなかった。第三に、カウツキーは、「歴史なき民」の理論に歴史研究を対置したが、エンゲルスを理論的には批判せず、むしろ48年革命期の歴史的背景の下で正当化してしまったために、クーノウが「歴史なき民」を利用して帝国主義を正当化しようとしたときに十分に反論することができなかった。

もちろん、カウツキーは挫折しただけではない。クーノウとの論争においてインターナショナルリズムの意義を再認識し、帝国主義に抗して国民国家の維持を主張したことはこの領域におけるカウツキーの重要な貢献であった。このようなカウツキーの貢献は今日では忘れ去られているが、同時代の社会主義者のなかにはそれを高く評価した者もいた。例えば、第一次世界大戦後、プロヴィナの社会民主主義者ヤコブ・ピスティナーはカウツキーの功績について次のように述べている。「戦争中、カウツキーは中央ヨーロッパという仮面の下で宣伝されていた帝国主義的構築物と、クーノウの大規模国家論に極めて鋭い調子で反対し、国民国家の形成への傾向を証明した。これはもちろん、戦争から民族的再生と民族的独立を期待していた東南ヨーロッパにとって極めて大きな意味を持っていたのだ」と。<sup>90)</sup>

## 注

- 1) Friedrich Engels, Der demokratische Charakter des Aufstandes, in: Karl Marx, Friedrich Engels, *Werke*, hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin 1982 [以下 *MEW* と略称], Bd. 5, S. 108.
- 2) Die auswärtige deutsche Politik und die letzten Ereignisse zu Prag, *MEW*, Bd. 5, S. 202.
- 3) Karl Marx, Sieg der Kontrerevolution zu Wien, *MEW*, Bd. 5, S. 456.
- 4) Engels, Der demokratische Panslawismus, *MEW*, Bd. 6, Berlin 1999, S. 275.
- 5) Leszek Kolakowski, *Der revolutionäre Geist*, Stuttgart et al. 1972, S. 45.
- 6) Karl Marx, Ökonomisch-Philosophische Manuskripte, in: Karl Marx, Friedrich Engels, *Gesamtausgabe*, hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Kommunistischen Partei der Sowjetunion und vom Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands, Berlin 1975 [以下 *MEGA*<sup>2</sup> と略称], 1. Abteilung, Bd. 2, S. 245.
- 7) 勝又章夫「マルクス、エンゲルスにおける人間的解放と民族問題」神田順司編『社会哲学のアクチュアリティ』未知谷2009年, 149頁.
- 8) Karel Kosík, *Česká radikální demokracie*, Praha 1958, str. 242,
- 9) Verzeichniß der am 11. März im Wenzelsbadsaale vorgetragenen Petitionspunkte, in: F. J. Schopf, *Wahre und ausführliche Darstellung der am 11. März zur Erlangung einer constitutionellen Regierungs-Verfassung in der königlichen Hauptstadt Prag begonnenen Volksbewegung und der hierauf gefolgten Ereignisse als ein Beitrag zur Geschichte und ein Angedenken an die verhängnisvolle Zeit, chronologisch verfasst und mit allen Urkunden belegt*, 1.Heft, Leitmeritz 1848, S. 46.
- 10) Staatsgrundgesetz vom 21. Dezember 1867, über die allgemeinen Rechte der Staatsbürger für die im Reichsrathe vertretenen Königreich und Länder, in: *Reichsgesetzblatt für das Kaiserthum Oesterreich*, Wien 1867, S. 396.
- 11) *Ebd.*
- 12) Gerald Stourzh, *Die Gleichberechtigung der Nationalitäten in der Verfassung und Verwaltung Österreichs 1848-1918*, Wien 1985, S. 56.
- 13) Josef Seliger, Die Minoritäten, wie sie entstehen und wie sie erwachen, in: *Der Kampf*, Bd. 2, 1908/09, S. 12.
- 14) André G. Whiteside, *Industrial Transformation. Population Movement and German Nationalism in Bohemia*,

- in: *Zeitschrift für Ostforschung*, 10.Jg., Heft 3, Marburg / Lahn 1961, S. 265.
- 15) Verordnung der k.k. Minister des Innern und der Justiz vom 19. April 1880, in: *Landes-Gesetz-Blatt für das Königreich Böhmen*, Jg.1880, enthaltend die Stücke I–XVII, Nr.1 bis 93, Prag 1880, S. 34.
  - 16) Hannelore Burger, *Sprachenrecht und Sprachengerechtigkeit im österreichischen Unterrichtswesen 1867–1918*, Wien 1995, S. 84.
  - 17) Albert Fuchs, *Geistige Strömungen in Österreich 1867–1918*, Wien 1996, S. 179ff.
  - 18) Burger, *Sprachenrecht und Sprachgerechtigkeit im Österreichischen Unterrichtswesen 1867–1918*, a.a.O., S. 94/95.
  - 19) Otto Bauer, Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, *Werkausgabe*, Bd. 1, S. 315.
  - 20) Jan Havránek, The Development of Czech Nationalism, in: *Austrian History Yearbook*, Vol. III, Pt. 2, 1967, p. 226, p. 244.
  - 21) John F. N. Bradley, *Czech Nationalism in the Nineteenth Century*, New York 1984, p. 25.
  - 22) Kautsky, [Autobiographie], in: *Die Volkswirtschaftslehre der Gegenwart in Selbstdarstellungen*, Leipzig 1924, S. 118.
  - 23) *Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der deutschen sozialdemokratischen Arbeiterpartei in Oesterreich, abgehalten in Innsbruck vom 29. Oktober bis 2. November 1911*, Wien 1911, S. 129.
  - 24) Kautsky, [Autobiographie], a. a.O., S. 118.
  - 25) Kautsky, *Erinnerungen und Erörterungen*, hrsg. von Benedikt Kautsky ‘S-Gravenhage 1960, S. 401.
  - 26) スティーンソンは少年時代のカウツキーのチェコ・ナショナリズムをバラツキーのそれと関連づけようとしているが、説得的とは思われない。Gary Steenson, *Karl Kautsky 1854–1938, Marxism in the Classical Years*, Pittsburgh 1978, p.20. 後述するように、カウツキーがバラツキーと似た主張を展開するのは1890年代になってからである。
  - 27) Zdeněk Šolle, Die Sozialdemokratie in der Habsburger Monarchie und die tschechische Frage, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, Bd. VI/VII, Hannover 1966/67, S. 339. オットー・バウアーのドイツ・ナショナリズムに関しては、勝又章夫「オットー・バウアーと民族自治——チェコ少数派学校をめぐる」、三田史学会編『史学』2008年、第77巻第1号を参照。
  - 28) [Kautsky], Die nationale Frage. Von einem österreichischen Parteigenossen, in: *Der Volksstaat. Organ der sozialdemokratischen Arbeiterpartei und der internationalen Gewerkgenossenschaften*, Nr.29 von 1875.
  - 29) Helmut Konrad, *Nationalismus und Internationalismus. Die österreichische Arbeiterbewegung vor dem Ersten Weltkrieg*, Wien 1976, S. 19.
  - 30) Engels an Kautsky, 7. Febr. 1882, *MEW*, Bd. 35, S. 272.
  - 31) Engels an Bernstein, London, 22. Febr. 1882, *MEW*, Bd. 35, S. 278ff.
  - 32) S. [Kautsky], Die „nationale Bewegung in Böhmen“, in: *Der Sozialdemokrat*, Nr. 29 vom 14. Juli 1881.
  - 33) Zdeněk Šolle, Die Sozialdemokratie in der Habsburger Monarchie und die tschechische Frage, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, Bd. VI/VII, Hannover 1966/67, S. 347.
  - 34) Kautsky, Die moderne Nationalität, in: *Die Neue Zeit*, 5.Jg., Stuttgart 1887, S. 448.
  - 35) Horace R. Davis, *Nationalism & Socialism. Marxist and Labor Theories of Nationalism to 1917*, New York / London 1967, p.140.
  - 36) Zdeněk Šolle, Die Sozialdemokratie in der Habsburger Monarchie und die tschechische Frage, a.a.O., S. 348.
  - 37) Kautsky, [Autobiographie], a.a.O., S. 120.
  - 38) John Schwarzmantel, *Socialism and the Idea of Nation*, New York et al. 1991, p.76.
  - 39) Kautsky an Hugo Heller, Stuttgart 23. April 1896, in: Victor Adler, *Briefwechsel mit August Bebel und Karl Kautsky sowie Briefe von und an Ignaz Auer, Eduard Bernstein, Adolf Braun, Heinrich Dietz, Friedrich Ebert, Wilhelm Liebknecht, Hermann Müller und Paul Singer*, gesammelt und erläutert von Friedrich Adler, Wien 1954, S. 206.

- 40) Victor Adler, Arbeiterversammlung über die Arbeiterkammern, in: ders., *Aufsätze, Reden und Briefe*, 5.Heft, Wien 1925, S. 185/186.
- 41) 1938年, 晩年のカウツキーは, 1878年に開催されたチェコスラヴ社会民主党のプラハ党大会と, そこで採択された党綱領を振り返り, 「党は民族ごとに組織されなくてはならないが, それは共同の闘争の障害とはならない」という組織原則は60年後の今日でも有効であると述べている. カウツキーが社会民主主義運動における諸民族の平等というチェコ人の要求の意義を認識していたことが読み取れる. Kautsky, Das Prager Programm von 1878, in: Karl und Louise Kautsky, *Briefwechsel mit der Tschechoslowakei 1879-1939*, Hg. Von Zdeněk Šolle, Frankfurt / New York 1993, S. 498.
- 42) Adler an Kautsky, Wien 21. August 1886, in: Adler, *Briefwechsel, a. a. O.*, S. 12.
- 43) Kautsky, Ueber die nächsten Aufgaben der sozialistischen Partei Oesterreich's, in: *Der Sozialdemokrat*, Nr.33 vom 15. August 1880.
- 44) Roman Rosdolsky, Friedrich Engels und das Problem der „geschichtslosen“ Völker. (Die Nationalitätenfrage in der Revolution 1848-1849 im Licht der Neuen Rheinischen Zeitung), in: *Archiv für Sozialgeschichte*, hrsg. von der Friedrich Ebert Stiftung, Bd. 4, Hannover 1964, S. 271.
- 45) Karl Kautsky, Vorrede des Uebersetzers, in: Karl Marx [Friedrich Engels], *Revolution und Kontre-Revolution in Deutschland*, 6. Auflage, Stuttgart 1920, S. XXII. ここでカウツキーは, 1848年革命期になぜエンゲルスがチェコ人に未来を認めようとしなかったのか, 説明しようとしているが, スターリンはその意図を歪曲し, 「背教者, 改良主義者カウツキー氏」は「オーストリア・ドイツ統一国家において前世紀の半ばにプロレタリア革命が勝利していたならば, 統一的なドイツ語の形成とチェコ人のゲルマン化がもたらされたであろうと主張している」と述べている. スターリンのこのような発言はカウツキーに対する不当な攻撃であると言うべきであろう. Иосиф Виссарионович Сталин, *Политический отчет центрального комитета XVI Съезду ВКП(б)*, Сталин, *Сочинения*, Том 12. Москва 1949, стр.364.
- 46) Kautsky, Vorrede des Uebersetzers, *a. a. O.*, S. XXII/III.
- 47) *Ebd.*, S. XXIV.
- 48) *Ebd.*, S. XXVIII.
- 49) Karl Renner, *Karl Kautsky. Skizze zur Geschichte der geistigen und politischen Entwicklung der deutschen Arbeiterklasse*, Berlin 1929, S. 73.
- 50) Otto Bauer, Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, *a. a. O.*, S. 247.
- 51) Rosdolsky, Friedrich Engels und das Problem der „geschichtslosen“ Völker. (Die Nationalitätenfrage in der Revolution 1848-1849 im Licht der Neuen Rheinischen Zeitung), *a. a. O.*, S. 271.
- 52) Kautsky, Der Kampf der Nationalitäten und das Staatsrecht in Oesterreich, in: *Die Neue Zeit*, 16.Jg., Bd. 1, 1897-98, S. 558.
- 53) Th. G. Masaryk, *Die philosophischen und soziologischen Grundlagen des Marxismus. Studien zur sozialen Frage*, Wien 1899, S. 436.
- 54) Otto Urban, Der tschechische Austroslavismus nach dem österreich-ungarischen Ausgleich, in: Andreas Moritsch (Hg.), *Der Austroslavismus. Ein verfrühtes Konzept zur politischen Neugestaltung Mitteleuropas*, Wien / Köln / Weimar 1996, S. 43.
- 55) 矢田俊隆「オーストリア社会民主党と民族問題」, 『スラヴ研究』7号1963年.
- 56) 丸山敬一『マルクス主義と民族自決権』信山社1989年.
- 57) 相田慎一「カウツキーの民族理論」, 『立教経済学研究』, 第44巻第3号1991年.
- 58) Kautsky, *Habsburgs Glück und Ende*, Berlin 1918, S. 63.
- 59) 相田慎一『言語としての民族 カウツキーと民族問題』御茶ノ水書房2002年. 224頁.
- 60) Franz Palacký, Eine Stimme über Österreichs Anschluß an Deutschland, in: ders., *Oesterreichs Staatsidee*, Prag 1866, S. 152.
- 61) 山中秀人「パラツキーの国家理念」, 『史苑』, 第66巻2号2006年.
- 62) Kautsky, Nochmals Kampf der Nationalitäten in Österreich, in: *Die Neue Zeit*, 16.Jg., Bd. 1, 1897-98., S. 725
- 63) Franz Palacký, Eine Stimme über Österreichs Anschluß an Deutschland, *a. a. O.*, S. 152.



- 64) Kautsky, Nochmals Kampf der Nationalitäten in Österreich, *a. a. O.*, S. 726.
- 65) 『ドイツにおける革命と反革命』への序文においてカウツキーは48年革命期のマルクスとエンゲルスの立場と「最終的に断絶した」というヘルムート・コンラートの評価は過大ではないだろうか。Helmut Konrad, *Nationalismus und Internationalismus. Die österreichische Arbeiterbewegung vor dem Ersten Weltkrieg*, Wien 1976, S. 79.
- 66) Heinrich Cunow, *Partei-Zusammenbruch? Ein offenes Wort zum inneren Parteistreit*, Berlin 1915, S. 29.
- 67) *Ebd.*, S. 33.
- 68) *Ebd.*
- 69) Rosdolsky, Friedrich Engels und das Problem der “geschichtslosen“ Völker, *a. a. O.*, S. 150.
- 70) Charles Herod, *The nation in the History of Marxian Thought. The Concept of Nations with History and Nations without History*, the Hague 1976, p.67.
- 71) Kautsky, Zwei Schriften zum Umlernen, in: *Die Neue Zeit*, 33.Jg., Bd2, 1915, S. 76. このようなカウツキーの主張をレーニンは『自決に関する討論の総括』において民族自決権を制限するために利用している。Владимир Ильич Ленин, Итоги дискуссии о самоопределении, *Сочинения*. Издание Четвертое, Том 22, Москва 1953, стр.326.
- 72) Franz Mehring, Einleitung, in: *Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx und Friedrich Engels 1841 bis 1850*, hrsg. von Franz Mehring, 3. Bd. Stuttgart 1923, S. 64/65.
- 73) Kautsky, Zwei Schriften zum Umlernen, *a. a. O.*, S. 76.
- 74) Cunow, Illusion-Kultus. Eine Entgegnung auf Kautskys Kritik meiner Broschüre „Partei-Zusammenbruch?“ in: *Die Neue Zeit*, 33.Jg., Bd. 2. 1915, S. 178.
- 75) Kautsky, Die Befreiung der Nationen, in: *Die Neue Zeit*, 35.Jg., Bd. 2., 1917, S. 147.
- 76) Cunow, Marx und das Selbstbestimmungsrecht der Nationen, in: *Die Neue Zeit*, 36.Jg., Bd. 1, 1918, S. 608.
- 77) Kautsky, *Die materialistische Geschichtsauffassung*, Bd. 2, 1927, S. 582.
- 78) Rosdolsky, Friedrich Engels und das Problem der “geschichtslosen“ Völker, *a. a. O.*, S. 196.
- 79) Kautsky, Die Befreiung der Nationen, *a. a. O.*, S. 184.
- 80) *Ebd.*, S. 187/188.
- 81) *Ebd.*, S. 187.
- 82) *Ebd.*, S. 149.
- 83) Cunow, Illusion-Kultus, *a. a. O.*, S. 175.
- 84) Kautsky, Der tschechische Staat, in: *Arbeiter-Zeitung*, 33. Jg., Nr.317 vom 20. November, Wien 1918.
- 85) Kautsky, Mitteleuropa, in: *Die Neue Zeit*, 34.Jg., Bd. 1, 1916, S. 461.
- 86) *Ebd.*, S. 463.
- 87) Kautsky, Die Befreiung der Nationen, *a. a. O.*, S. 185.
- 88) 相田愼一『言語としての民族。カウツキーと民族問題』, 164頁。
- 89) Kautsky, *Sozialisten und Krieg*, Prag 1937, S. 107.
- 90) Jakob Pistiner, Der Sozialismus in Südosteuropa und Karl Kautsky, in: *Die Gesellschaft. Ein Sonderheft der Gesellschaft zu Karl Kautskys 70. Geburtstag*, Berlin ca. 1924, S. 108.